
孤独症候群

くりゆー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤独症候群

【Nコード】

N2675Z

【作者名】

くりゅー

【あらすじ】

『普通』なようで、『普通』に『普通』じゃないとある高校2年生 山田太郎は、周りから『普通』だと言われることにコンプレックスを抱いていたが。

『普通』じゃない妹と

『普通』じゃない弟によって

『普通』なようで『普通』に『普通』じゃない山田太郎は

『普通』じゃない『事件に巻き込まれてゆく。』

1章・普通症候群1（前書き）

初めて、小説というものを書きます。くりゅーです。

元々小説を余り読まない…というか全く読まないのですが、小説家である伯父に感銘を受けて書きはじめました。

文章も稚拙な部分が多く見られるでしょうが

最後まで誰か一人でも見ていてくれたら嬉しいです。

1章・普通症候群1

僕は今とっても憂鬱だ。

とある高校の2学年教室の一室の一番廊下側の最前列の席。

『自分』って物に嫌気がさしてくる
と

《並山大学 合格判定D》

とかかれた模試の結果通知を見ながら、そう感じていた。

目指す大学が難しいと言えは難しいのだが、合格判定Dという残酷な判決は、メランコリイになるには十分な材料だろう。

だが、僕にはもう一つ。ショックな知らせがその通知にはかかれていた。

「おーい！お前、今回もやりやがったか??」

僕の気分などお構いなしに、コイツは喋りかけてくる。

名前は瀧澤太陽。

身長は僕より10センチ弱大きく、俗に言う『細マッチョ』。髪の毛は少し長く、学校の生活指導の基準スレスレだ。そして顔は、恐らく僕よりもイケメンだ。

「お前……ロクな結果じゃなかっただろっに……。よく元気でいら

れるな」

瀧澤は文字通り太陽のような奴で、クラス一のひょうきんものだ。声はデカイし、下ネタはスゴイし、いらないところで頭が高速回転するバカだ。

また空気が読めないという欠点も兼ね備える彼はまさしく『残念なイケメン』だ。

「ハッ、俺は勉強はできないけどよ。こっちのほうは天才だからよ！ 気にしねえのさ！ 点数なんかよ」と力瘤を見せつけて自慢気に話すが

それは開き直るようにしか聞こえない。

だがコイツの運動能力は言う通りすさまじい。

つまり彼は

《特出した才能が一個でもあれば、それでいい》
そう言いたいんだろう。悔しいが確かにそうだ。

しかし僕にはそれがない

「で??? どうなんだよ... グラフのほうは?」

一瞬、コイツの馬鹿さ加減に氣をとられた隙に太陽に見られてしまった

「おほほww!! すげえ！ お前すげえよww」

見られてしまったのは

右下の得点推移の折れ線グラフだ。

通常これには三つのグラフがかかっている。

一つ目はここ普原西高校の第2学年全体の平均値の推移。

二つ目は全国の平均値の推移。

三つ目は受験者自身の得点の推移。

僕には三つ目のグラフがかかれていない。

ちがう。

二つ目のグラフと三つ目のグラフがピッタリとドッキングしているのだ。

つまり……

「コイツまた平均値だぞ？すつげえな！！」

つまりそういうことだ。

「うつせえ！！騒ぎ立てんなよっ」

そんな言葉虚しく、周りに人が寄り付いてくる。

休み時間のためたくさんの人にかこまれる羽目になった。

「すごいじゃん！！すごいよ太郎。なかなかないよこんなこと！」

聞いてしまったでしょうか。

寄ってくる男子どもに紛れ、一人の女子が スーパーヒーローを見
るようなテンションで語った中に、

『太郎』という単語が聞こえてしまっただろうか。

それは僕の名前だ

《名前：山田太郎 ヤマタ タロウ》
と丁寧にもフリガナまで、僕の模試の結果通知にもかいてある。

「体力測定も、身長も、座高も、体重も、学力もみんな全国平均値
なんてすっごいよ！テレビでれるよww」

この女の子

ブロンドのロング髪を携えたこの
小鳥遊 遊 という僕の幼なじみは、僕の心のデリケートな部分に
ズカズカと土足でお邪魔してくれた。

トドメに

「日本一『普通』って言葉が似合う学生だよね！太郎って」
と言い放つ小鳥遊 遊。

「うるせー！太陽だの小鳥遊だの…、お前らには『山田太郎』の気
持ちがわかるかよオオ」

机に突っ伏し、これ以上のメンタルへのダメージを防ぐ態勢に入った

「あはは… 弄りすぎた… かな??」

「おいおい…顔上げろって」
小鳥遊も太陽も優しい言葉をかけてくれるが、
もはやそれすらも煩わしい

そんなことをやってる内に5限目のチャイムがなった。

僕が憂鬱な理由。

それは合格判定がDだったこと
それにプラスして

全国平均値とまるかぶりだったこと

つまり

『普通』であることだ。

まあ

今に始まったことではないのだが…

人生最大のコンプレックスであり
人生最大の悩みだった。

悩みなら同レベルの悩みがまだあるなあ……。

そんなことを思いながら、

必死にデリケートなハートを修復し5限目は終わった。

そうだ。今日は5限で終わりだった。

1章・普通症候群2

僕はマンション暮しだ。学校に徒歩で通学できるほど近くにあるマンションだ。

僕はいつもの『普通』の通学路を下校していた。

いや。僕らは…が正しいな。

「ねえねえ！この前貸したラノベ読み終わった？」

ブロンドのロング髪を携えた彼女は
小鳥遊 遊。

身長は僕より5センチほど小さいが、胸は……まあ、その…そこそこあった。

「読み終わらないよ…だって借りたの昨日の夜だぞ？」

彼女と下校するのは付き合ってるからとかじゃない。
彼女も僕の住むマンションに住んでいるのだ。

「そうだったけ？…じゃあ…どこまで読んだ！？」

大きなかわいらしい目をこちらに向けながら、覗き込むような姿勢で見つめてきた。

「まだ読んでないよ。今日、早帰りだし読むよ」

「はやく読んでよ〜」

やたらとくつついてくる彼女は、僕を男として意識してないのだろう。

幼なじみが言うのも…アレだが…。

遊は学年でもかなり可愛いほうの女子だ。ブロンドのロングというところもポイントは高い。

しかし、どちらかと言えば女子と話すのが苦手な僕も、彼女とは普通に喋れる。

これは幼なじみ故の慣れと彼女の親しみ易い性格のおかげだろう。

時々、女性として意識してしまうが。

僕にとっては良い友達だ。

「ラノベの推理モノだからって嘗めないでよ！すごい仕掛けがあるって…」

熱弁する遊は、僕が殆ど聞いてないこともわかってない。

「あ！それ知ってる！それ1巻？あれでしょ、あの居酒屋のおっちゃんが犯人だったっていう奴でしょ！！？」

彼女の隣にいた瀧澤はここぞとばかりに、空気を読まずに、会話に入ってきた

「ネタバレしてんじゃ……ないわよッ！！」

遊の綺麗な足から、すさまじい威力の蹴りが繰り出された。

「あべしっ……！」

太股を抱え悶絶している瀧澤

「お前ホント…残念なイケメンだよな」

マンションにたどり着くと、遊とふたりきりになっていた。

いつものことだ。

小、中、高校といつも繰り返していたことだけあって、何も感じない。

瀧澤とはマンションに着く少し前に別れた。これもまたいつものことだ。

ふたりきりでマンションに入り、エレベーターに乗り、降りる。

僕と遊は8階の住人なので、そこで降りる。

僕は自分の部屋の鍵を開けると、

隣の部屋の住人の遊は先に鍵を開けたらしい

「じゃあ、ご飯になったら呼びに行くから。お母さんとききてね」

「あいよ。いつも、ありがとうな」

適当に返した返事だった。が遊にはそう受けとらなかつたらしい

「べつ…別にいいわよそんなの。そ…そもそも私がつくつたんじゃなくてお母さんがつくつたものだし……ありがとうならお母さんに
いって！」

なにか不自然な遊の挙動。

「なに焦ってんだよ…？」

「あつあ…焦ってなんかいいわよ…。ただ。太郎がありがとうなんて珍しいから……」

遊はどうやら普通にもどつたらしい。

「…そうだっけ？いつも感謝してるぜ、お前んちにはな。」

小鳥遊家にはかなりお世話になっているのだ。ホントに感謝している。

「じゃあね」

遊が部屋入ったあとも、しばらく僕は廊下にいた。

小さい頃からここで育ってきた僕には、余り意識しなかったが。周りをよく見てみるとこのマンション。『普通』に入居したら、かなりのお金がかかる物件だろうと思った。

寒さも感じられ、ドアを開けて僕も部屋に入っていった

そこで

もう一つある人生最大の悩みにぶちあたる。

「ただいま」

返事は無い。

一人暮らしだから返って来るわけない？

いや、僕は一人暮らしではない。

玄関から真っ直ぐ廊下を進んで左をむく。すると二つの部屋のドアがある。

左側、つまり玄関側のドアには

《ユウハの部屋》

という札が垂れ下がっている。サッカーボールが描かれており、男の子の部屋なんだな とすぐにわかるようになっていいる。

左隣の部屋は

《ゆあのへや》

とかわいらしく、ウサギさんなんかといっしょにかかれた札が垂れ下がっている。

「おーい。生きてるか？」

ふざけ調子で言ってみた。が部屋からは生き物がいる気配がない。

「…………お兄ちゃん…………？…………お帰りなさい…………」

《ゆあのへや》

からはか細い、妖精のような声が聞こえた

しかし

《ユウハの部屋》からは何も聞こえない

よく耳をすますと

カタカタカタカタと機械的な音が聞こえる

この二人は僕の妹と弟だ。二人は二卵性双生児なのだが、性格は…
…うーん。似てなくはないか…。

今日は早帰りで、下手をすれば小学生より早く帰れたんだが。

二人はココにいた。

別に熱があるわけでも、学校がインフルエンザで休校してるわけでもない。
つまり

僕の悩みはそこなのだ。

二人はこのまま行けば二ト確定の『引きこもり』なのだ。

溜め息をつきながら廊下を抜けリビングのコタツの電源をいれ、カーテンをしめる。

8階となると眺めはいい。

といっても、都会というより田舎なこの普原町の夜は真っ暗。

普原町の隣、芝川を挟んで向こうにはでかいビルが建ち並んでいて、ほのかに夜景が綺麗ではあるが。

いつもは帰ってくると夕方、面白いテレビをやっているのだが。

今日はまだ3時にもならない。テレビを回してもなんだかアンテイクな番組ばかりだ。

いつもなら、こんな気は起きないが。

返事の無いユウハの部屋がすごい気になる。

というより

普通の人は普通に学校に行ってこんなメランコリイな気分になつても、宿題だなんだって立派に苦しむのに…

妹と弟は…そういう苦しみをショートカットしてるようで、なんだから悔しかったのだ。

「今日こそは言ってやる。いや言うだけじゃたらない、明日から…学校に行かせよう。」

2章・双子症候群

太郎は文句を行ってやろうと思いながらコタツで寝てしまった。

時計を見るまでもなく…周りは真っ暗だ。

眠い目擦りながらケイタイをとりだし、時計を確認した。

「……7時…か…」

ふと、お腹が寂しい感覚がした

「ご飯できてるかな…」

暑くなったコタツの電源を落とし、廊下に目をやると
ちやわんと小皿が2セット　ちよこんとおいてある。

「……自分勝手な引きこもりさんだな……。」

そのちやわん達は

昨日のご飯に使われたものだ。

それが出されているってことは

『ごはんよこせ』のサインだ。

「…動かないくせに、食べるのかよ…まったく………」

そんな食生活でも、二人はけして太らない。むしろ痩せている。

遊は食事を取りすぎると

『体重増えたアア』

って落ち込むのに。

熱の冷めたコタツから出て、外界の寒気に体を震わせながら、ちやわんをひろった。

もちろんこの食べ終わって一日放置しておいた食器に、食事はよそらない。

ローテーションで使い回してるのだ。

僕は部屋をでて、隣の遊の部屋のさらにそのまた隣の、小鳥遊のお母さんの家に向かう。

まあ、遊のお母さん…とかそんなよそよそしい関係ではない。

小鳥遊 遊の母、小鳥遊 美空は僕らの育て親なのだ。

実の母、実の息子のような関係なのだから。

ドアを開けると、いいにおいが香る。

揚げ物の香ばしい匂い。

「太郎〜お皿あらつといて〜」

美空おばさんは揚げ物片手間で僕にニートたちの食器を洗えという。まあ いつものことだが。

「ほいほい。…あれおばさん。遊は??」

食卓のほうでいつも飯を待ち構えている遊の姿が見当たらない。

「部屋でシャワー浴びてるよ。太郎も一緒に入ってくればあ」

ニヤニヤと笑いながらこちらを見る。

「実の娘を僕に襲わせる気がよ…」

「何の話を…してるのよ…!」

湯上がりのブロンドの髪は何時にもまして妖艶だが…顔つきが怖い。

「いいじゃないの。小学生高学年まで一緒にお風呂に入ってた仲間じゃない」

爆弾発言してくれたババアは

まあババアというには若すぎる。

今年30歳の彼女は元グラビアアイドルだけあって、スタイルは抜群だ。

「はあああ!?! なっ…なにいつてんのよお母さん!!」

「大体あれはあんたがっ!」

流石に僕も、遊も慌ててしまう。

まったくやめてほしい。年頃の若い男と女のまえでそういうことを話すのは。

「さあさあ。ご飯にしましょー!」

茶髪でポニーテールなのが若く見せているのだろう。

実年齢より5歳は若くみえる。

部屋はかなり広く、三人じゃ空間的にも少し寂しい。

しかし賑やかな親子と一緒に食事を見ると、空間的な寂しさは全く感じられなかった。

「ごちそうさま」

ご飯も食べ終わり、先程からおばさんに言おうとしてたことを切り出す時がきた。

「なあ、おばさん。やっぱりあいつら学校に行かせたほうがいいんじゃないか!？」

こんなこと、普通なら『そうだね』で返すのが当たり前だろう。しかし、そうはならない。

「いいじゃない。学校に行きたいって言うてるわけじゃないんですよ?なら、無理に行かせることないわよ。」

おばさんの答はおかしい。

しかし、僕らを養ってくれているのは、小鳥遊家の母 美空だ。

以前は美空には旦那がいた。

外国人で良いところのお坊ちゃまだったらしい。

その旦那が子を孕ませるだけしておいて、金を残してどっかに消えてからは、美空が身を削ってお金を稼いで家族を養ってきた。

そんなおばさんが行かなくていい。といってしまつと、変に僕は口出しができなかった。

「小学生から引きこもりじゃ…この先大変だよ？お母さん」

遊もおかしいと思ってくれたみたいだ。だが

「小学生だつたらまだいいじゃない。第一、あの子達が学校に行つて嫌な思いをしたらどうするの？？」

「な……なに勝手にあいつらを値踏みしてんだよ！あいつらは嫌な思いをしたくらいで心が折れるような弱い人間じゃない！」

馬鹿にされた気がした。そんなことから守らないとダメな弱い子だ。そういう風に聞こえた。

あんな引きこもりの妹や弟でも、やっぱり僕の妹なんだな、僕の弟なんだな。

あいつらを馬鹿にされてつい カッとなつてしまった。

行間・『普通じゃない』事件

午後8時を回っていた。

深夜でも無いのに普原町は真っ暗だった。

商店街のむこう。

住宅街。ちょうど太郎達のマンションがある地域のとある路地。

その路地をあるっている男がいた。

男は先週彼女とも別れ、職の安定しない生活を送っていた。

「こんな時は、ビールでものまねえと…やってらんないよなあ。」

人気の無い路地だからといって、愚痴が漏れてしまっていた。

最近新しく始めたバイト先の先輩について愚痴。うざい面接官について愚痴。

大半は別れた彼女に対しての愚痴だった。

まだ酒も入っていないのに、もう酔っているようだ。

トボトボと歩くと、目の前に人影が見えた。

他人がいることを意識し姿勢を正した。

勿論お口にチャックもした。

酔いが醒めたようだった。

（やっべえ…聞かれたかな…恥ずかしッ…まあそんなにポリュームでかく無かったし？あの距離なら聞こえてないよな…？）

そんなことを考えながら男は再度、むこうからくる人影の大きさを確認した。

この路地は電灯と電灯の間隔が広く、余り前がよく見えない。だが、対向者との間隔が近づくにつれ、明瞭になってくる。

（…酔っ払いか…）
人影の正体は

フラフラと千鳥足で歩いてくるコートを着た中年くらい男だった。背は猫背っぽいのでたしかじゃないが、170は軽くある。

（酔っ払いなら…全然大丈夫だな…）

実はまだ愚痴が聞こえたんじゃないかと気になっていた男は、ここに来てやっと安心した。

『ピロリロリロン』

メールだ。

ポケットの中にはいていた。ケータイを取り出し内容を確認した。

《こんばんわ》

登録されていないアドレスからだった

（なんだこれ……？？？）

迷惑メールか間違いメールだろう。男は何かからかわれた気分になり、無愛想にケータイを閉じた。

「こんばんわ」

誰かが耳元で囁いた。

「……っひッ……！！！」

その声の持ち主が、先程まで50mほど離れた先にいた、あの人影のものだと即座に理解した。

帽子を深く被り、白いスケキヨのようなマスクをつけた。コートの
大男の手には包丁があった。

「うわああッ！！助けッ！！誰かッだれかアア！！」

元々人気の少ない路地だ。助けは来るはずがない。

「さようなら」

その言葉とともに。

悲鳴は終わり、子供のような笑い声が始まった。

2章・電波症候群

結局おばさんは説得できず、あいつらを外に放ってやることもできなかった。

好き勝手やってるあいつらに何か、負けたような悔しさと、あいつらが外にでる為に何もできなかったことに対しての申し訳なさが渦を巻く。

ドアを開けてみると妹の友愛がいた。
トイレに行った帰りなのだろう。

部屋からでることも珍しい友愛にジャストタイミングで会えたことに、四つ葉クローバーを見つけた時にも似た高揚感が、劣等感やら自責の念やらを払拭してくれた。

小学5年生にしては幼すぎるような顔つきと体つきだ。
いつもくらい部屋の中でベッドに座り込んでパソコンやらテレビを見ている姿ばかりを見ていたものだから、久しぶりに全身を良く見ることが出来た気がした。

「…？ご飯まだ？」

首を傾げると、日本人形のような長い黒髪がサラサラと流れる。
日がな一日部屋に籠る妹の肌は透けるように白かった。

「ああ…遅くなっちゃったな…悪い」

遊と話すよりも、身内なのに余り会話もしなければ、顔もあわせない妹と話すほうが、なにか話しづらい。

そう言つて、玄関のドアを開けるためにお盆ごと床に置いた二人の食事を持ち上げた

「……うつん…ありがと…」

引きこもりとはいっても、他人に心を閉ざしてるわけじゃない。お腹がすいて、おいしそうな物を見て笑顔になれるんだ。

「どうしたの？ねえちゃん？」

友覇が部屋のドアから顔を出した。

友覇は友愛の双子の弟だ。顔つきも似通っているが、やっぱり男の子の顔だ。

友愛もそうだが、小学5年生にしては、幼いような顔つきで肌も透けるように白い。髪は余り手入れをしないから男の子にしては長い黒髪。

「…なんでもないよ……ゆー…ご飯きたよ」

「なんだよ！待ちくたびれたよ兄ちゃん！遅いつての！」

こちらを見ると良くわかるが、やはり顔の形は友愛そっくりだ。その睨みつける目つきをやめさせ、髪の毛をとかしてあげれば可愛いらしい女の子にしか見えないだろう。その目つきを直せばな。

「だまつて感謝し…」

「で！ねえちゃん。これこれ…このサイト！」

人の話を無視して話題を変えやがった。

人生の色んなモンをショートカットしてるくせに、反抗期はちゃんとやるんだな…。

「どれ？」

友愛が友覇につれられた《ユウハの部屋》に入る。

「…！」

この光景はずっと暮らしてきたが、こんなことは一度もなかった。

「おまえら…互いの部屋行き来したり、してたのか？」

《ユウハの部屋》の奥にある四台パソコンの内の一つに夢中で食らっていた友覇は忌ま忌ましそうに言った。

「そうだよ…」

「へえ…兄ちゃん、知らなかったな」

ちよつと嬉しいかった。ずっとお互い一人で引き込もってたと思っていたから。

こうやって見ると、普通の姉弟だな。

しみじみと珍しくドアを開けたままのユウハの部屋に入って二人の
見ているものを覗こうとした

「兄ちゃん！気をつけて入ってよ！！」

友覇が怒鳴る。

「…わかった…」

悔しいが、ここで言い返すとパソコンの画面を見せて貰えそうになるので謝った。

「兄ちゃん、そのヤツさわらないでよ？」

「わかってるよ…」

そのヤツとは
アニメキャラクターねフィギュアの軍団のことだ。

そう友覇は引きこもりにして、アニメ、ゲームに関してのオタクなのだ。

しかし、イケメンのオタクというのはまったくオタクらしくない。

「ほんと…！私の予言どおり……すごい！」
大きな瞳をキラキラ輝かせて、パソコンの画面を見ながら嬉しそうに言う。

ちなみに言うておくが、コイツは引きこもりであり電波娘だ。

予言だの宇宙だの魔法だの　そういう言葉をかけると、話にならなくなってしまう。

今回はもう…電波に目覚めてしまったらしい。

「こんなこと、してる暇は無いわ……」

そういうと床にあるフィギュアケースを円状に並べた

「ねえお兄ちゃん！トイレトペーパーない？トイレトペーパーを賢者の石“エリクシル”に見立てて術式を組み上げるの早くしないと宇宙との交信が出来ないわ！トイレトペーパーでなくともいいの、似た形状なら形と意味が同じものなら、使うのはその二つだから。形つてのはね…」

「わかった！わかった！トイレトペーパーあるからっ！」

このままだと
延々と喋り続けるだろうと思いさっさとトイレトペーパーを持ってきてやった。

「魔法陣とか賢者の石とか宇宙とか、なんなんだよ、錬金術と魔法と宇宙をこっちゃんにするなよ」

友覇はそれについては常識のあるオタクだった。

「いいえ、違うの。魔術も錬金術も全部同じもの、宇宙をそれぞれの形で表現してるだけで、本質は似通ってるのよ…。宇宙ですら…」

また…語り始めた。こうなるといつもは口数の少ない友愛はリミッターが外れたように喋りだす。

「おい！いいのか？魔法つかって宇宙と交信しなくて」

この妹をこんな風になだめられる僕は、普通ではないだろう。

「そうだった！ありがとうお兄ちゃんっ！」

そう言うと、これまでに見たこと無いような機敏な動きで隣の自室へと向かう。

パジャマがはだけて肌が所々露出していたが、今の彼女には何を言っても無駄だろう。

「リアルと二次元の分別がつかないなんて…」

友愛は呆れたように呟いた。

「知らなかったのか？友愛が電波だったこと。」

パソコンの画面に視線を戻し友愛は答えた。

「知ってたさ。けどね何度みても、あの状態のねえちゃん理解できないんだよ。」

確かに、理解できないな…

そう僕は心で呟いた。

2章・怪人症候群

「…それで？なに見てたんだよ。」

漸く落ち着いて、聞ける時がきた。

あの孤立無縁に思えた二人が、一緒になって夢中で見ていたモノ。それが何か兄貴として知りたかった。

「これだよ」

そう言うつとパソコンの画面を指さした

え？え？なに？そんなに簡単に見させてくれたの？

とさっきまで若干下手にでてた自分を悔やみながら、パソコンの画面を覗いた。

《現代に現れた切り裂きジャックの末裔》

覗き込んだらそんな記事がネット掲示板に書かれていた。

『切り裂きジャック』というモノを知っているだろうか？

僕も良く知らない、2000年くらい？前のロンドンかどこかに現れた伝説の殺人鬼って風に理解していた。

「それね…ねえちゃんが予言した通りなんだ。」

おいしそうにご飯を食べながら友覇はいった。

「はア？なに？なにを予言したって？」

「だから、『もしも切り裂きジャックの子孫が現代にいたら、先祖の意思を継いで猟奇殺人事件を起こすんじゃないか』って一昨日ねえちゃんが言ったら…本当にそういう都市伝説があつてさ。」

それは予言とは違くないか？

と思いながらも

一番の疑問だけをぶつけた。

「でも…都市伝説なんだろう？なら探せばいくらでも……」

「実際に被害者が出たんだよ。」

一瞬、冷たい物が背中を這ったような気がした。

「ね！？凄いでしょ！実はね、僕も一昨日ねえちゃんの話きいてて、有り得なく無い話だなんて思ってた……聞してる？」

嫌な予感しかない。

何故？ 毎日のように殺人事件が報道されて…

それは皆、僕らと関係ないものじゃないか…

「それにね、その事件…」

秘密兵器を見せびらかそうとする、僕の驚く顔を見るのを待ち構えているような笑顔で 友覇は話続ける。

「ついさっき、並原町で起きたらしいよ？」

全身の毛が逆立つ。という言葉を実験した。

震える手で、パソコンの画面をスクロールしてみる。

《24日午後8時半頃、普原商店街の路上で男性の遺体の上半身が、普原町の住宅街に下半身が、それぞれ発見された。それぞれ右手、右足に“JackTheRipper”と刻まれており……》
更に下へスクロールすると、野次馬か何かが撮った現場の写真が上がついていた。

「8時…30？」

時計を見ると、時計は11時を指そうとしていた。

つまり、つい…1時間半前……この近くに“切り裂きジャック”がいた。

その事実、言いようのない恐怖に教われる。

それでも、弟の前で情けない態度は隠さなければならないという意味が働いた。

「……どうせ…愉快犯だよ。大方、こういう都市伝説を見て……」

“切り裂きジャック”じゃなくても、殺人鬼は消えないのに。

ただ何故か

“切り裂きジャック”を恐れていた自分がいた。

都市伝説に出てくる得体の知れない怪人がやってるわけじゃないと

…信じたかったのだろうか

「なんで！？偽物だつて証拠ないじゃん！？」

「…ジャックは女を襲うんだ。だから男が被害者である時点で……」
被害者が女に限られる、ジャックの方が僕には危険が及ばずにすむから良いはずなのに……

ジャックではないという根拠を探している自分がいる。

「へえ。そうなんだ…でも、それって今まで襲われたのが女の人っただけじゃないの？それに犯人がジャックの子孫なら、男を襲ったって別におかしくないよ」

確かにそうだった。

「それに、僕らは、ジャックの魂が取り付いた人間が事件を起こしてるんじゃないかって予想してるんだ。」

「…そんな訳……」

しかし、そういいながらジャックを肯定しようとする友覇の目は…無邪気そのものだ。そんな目を見てみると、何故か二人を守らなきゃ…という気持ちが沸き上がる。

別に、二人が狙われるわけじゃないし、狙われことになるとも思わない。

友覇の部屋から出た。すると不思議と『切り裂きジャック』への恐怖は凪いでいた。

それからなにをすることもなく。

ただカーテンを閉めて、布団を敷いて眠りについた。

今日はホントよく弟たちと喋ったな

友愛の部屋からはまだ、カッコイイような呪文が聞こえていた。

2章・夢想症候群

夢の中で父親にであつた。
顔も見ることないのにな。

というのも僕は物心ついた時にはすでにこのマンションにいて、その時から既に美空おばさんに世話になっていた。

まあ幼稚園の年長まで美空おばさんはお母さんだと思ってたし、そう呼んでいた。遊のことも兄妹だと思っていた。

僕の実の父親は『賭博暴王』の異名を持つギャンブラーで、実の母親も『勝利の女神』の異名をもつギャンブラーだそうた。

実際、どれだけ儲かつてるのかも知らない。

今は…というよりずっと彼らはアメリカのラスベガスで、日本に帰って来たことは、僕が生まれて以来一回もない。

何故、美空さんが育て親になってくれたのか。

その疑問は小学生高学年になってから教えてもらった。

おばさんは僕の父と母の知り合いで、そのため子育てを押し付けられてしまったらしい。

ただでさえ、同い年の娘を育てなきゃならないのに。

しかし、おばさんには前の旦那から貰った結構な金があるから引き受けたのだろう。

生まれてすぐに僕を引き取ったそうだ。

ちなみに、その時にはもう遊は生まれていた。

そしておばさんは元旦那の金でマンションを買い取って、管理人として収入を得ていたのだ。

そしてある日、僕が年長の冬に

「おばさん。僕、妹と弟がほしいよお」

そんな風にいっておばさんを困らせていたら

その年の12月の24日に

双子の赤ん坊と、その名前が記されたストラップがプレゼントされたのだ。

勿論、送り主は

僕の実の両親だが。

僕は太郎なのに

妹弟は友愛だの友霸だのと、手がかなりこんでいた。

これには流石に僕も悪意をかんじた。

それからというもの、毎月二人宛てにプレゼントが贈られてくるようになった。

今、妹や弟たちの部屋にある

合計16台のパソコンと合計2台のテレビも全て、両親からのプレゼントだ。

言っておくが、僕はプレゼントをもらったことは無い。

クリスマスだろうが誕生日も等しくプレゼントなど貰ったこと無かった。

妹も弟も、小学校2年までは普通に学校に通っていたのだが、3年の春から引きこもりになってしまったのだ。

夢の中で父親らしき人は僕にこう言った。

「兄ちゃんっていつてもまだお前は子供だ。妹と弟を守れっても荷が重いだろ。守れとは言わん。だから側にいて、あいつらの一番の理解者になってやってくれ」

朝起きると

時間は8時40分。

「ん？…げっ！…遅刻ッ……！」

と飛び上がるが、普通に間に合わない。
そう思い

余裕をもちながら用意をした。

いざ、行こうとドアを開けると

ゴンッ

「いったあああ！…！」

瀧澤のアホがいた。

瀧澤の話によると昨日の猟奇殺人事件で犯人はまだここらへんにいるかもってことで、今日は休校になった　という訳だ。

心の中で『瀧澤のアホがいた』

とか言っていた僕は、休校だったこともしらず遅刻するって焦って、揚句の果てには内心ヤバイヤバイとかいいながら余裕を装い支度をしていた自分に羞恥する。

とりあえず、そこら辺の茶菓子を出した。

「おゝさぶい、さぶい。」

ウィンドブレーカの下にサッカー部のユニフォームを着ているところを見ると

コイツも休校だとしらなかったらしい。

学校に行って気づいたのだろう。

仲間がいて、ちょっとホッとしながら、布団を片付けていると

「なんで起こしてくれないのよお！！！！太郎のバカバカばかあー！」
という叫びが隣の部屋から聞こえる。

半分泣きべそをかいている

ドタドタと部屋を行ったり着たりしている。 用意しているのだろ
う。

「あ！お仲間三人目はつけ〜んww」
とコタツと一体化しながら瀧澤はお菓子を食っている。

僕が玄関から顔を出して、遊の部屋のドアから遊が出てくるのを待ち伏せした。

しばらくドタドタと音がしたあと
ドアが開いた。

「おはよーさん」

ニヤニヤと遊のマヌケ面を眺める

「……………つうわあっ！???え！？なんで！？太郎！？」

パジャマに冬服の制服を上に着ていたが、胸の辺りは開けていて、
口にはパンをくわえていたのだが落としてしまった。

「随分とオシャレだね」

「ふえっ!？」

良く目を凝らしてみると、自分が物凄い格好をしてることに気づいて絶叫した。

「お邪魔します」

ちゃんと着替えた遊は、せっかくなので遊びにきた。

「チーッス!朝っぱらからいいコメディーだったな!」

我が物顔で、コタツに居座る瀧澤はケラケラ笑っている。

「な…ッ!？」

（瀧澤がいたの……?…はあ久しぶりに太郎が呼んでくれたと思ったのに…）

ちょっと残念そうな顔した遊を、ニヤニヤ見つめる瀧澤。

「三人とも、臨時休校の知らせメールに気付かないなんて、逆にす

「げーよな」

僕は追加分の湯のみを用意しながら行った。

「違うのよ！私は一回気づいて二度寝して、忘れてただけっ！！」

必死に弁解する遊。

「結局、覚えてないんじゃないじゃおんなじですー」

と湯のみもセットし終わったので、コタツに足を入れる

「むっ……う……」

遊は渋々コタツに座ってお茶を啜る。

「にしても、あの慌てっぷり凄かったなあ」

笑う瀧澤の前で遊は羞恥でどんどん赤くなってゆく。

「その慌てっぷりじゃ…パンツとかも履きわすれてんじゃないか？
あははは」

ちよつとふざけて言ってみただが。

「はっ…はいてるわよ！！…ヘンタイッ！大体、さっき着替えて来たんだから、もうテンパっ……て……あれっ??…うっ…うそ…
!?!」

立ち上がって遊は固まった。

「えっ…まじ？」

ふざけ半分で聞いたのに、有り得ない反応がきたから、思わず聞き返してしまった。

スカートを押さえながら　ぷるぷる　震えている。

「うわあああん！！何も言つなああああ！！！」

その悲鳴が引き金になったかのように
友覇の部屋のドアが開いた。

「今朝は、随分賑やかだね。」

珍しいものを見るように
瀧澤と遊はキョトンと、友覇を見つめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2675z/>

孤独症候群

2011年12月10日17時50分発行